18　次の【Ⅰ】・【Ⅱ】の文章はいずれも、ジャッキー・フレンチ作、さくまゆみこ訳『ヒットラーのむすめ〈新装版〉』の一部である。【Ｉ】の文章は、少女アンナが語った「ヒットラーの娘」の物語を聞いた少年マークがさまざまな疑問を持ち、マクドナルド先生に質問する場面である。【Ⅱ】の文章は、『ヒットラーのむすめ〈新装版〉』の訳者による新装版の「あとがき」である。【Ｉ】・【Ⅱ】を読んで、後の問いに答えよ。　　　　　　〈宮城教育大〉二〇二二年度出題

【Ⅰ】

　マークがドアからのぞくと、マクドナルド先生は机に向かって宿題の採点をしていた。

　「マーク、どうした？」先生がたずねた。

　「あの……ちょっとききたいことがあって」

　マクドナルド先生はちょっと困ってるみたいだ、とマークは思った。このところマークは母さんや父さんが答えられないようなことをたくさん質問していた……たとえば「神様はどれくらい速く自転車をこぐことができるのか？」とか、「生命はどんなふうに始まったのか？」なんていう質問だ。でも、先生は採点簿を横にどけて、マークに言った。

　「いいよ。何でも言ってごらん」

　「知りたいことがあったんです……」マークはゆっくりと始めた。

　「ばかばかしいかもしれないけど、子どもはみんな、親みたいになっちゃうのかなって考えてたんです」

　マクドナルド先生はむずかしい顔をして言った。

　「どういう意味か、よくわからないな」

　「あの、たとえば、だれかのお父さんがすごく悪いことをしたとしたら……たとえば、ヒットラーとかポル・ポトみたいにですけど……その子どもも悪くなるんですか？」

　マクドナルド先生は、ほっとしたような顔をした。もっと答えにくいことをきかれるかと心配していたのかもしれない。

　「いい質問だね、マーク。そういう子どもたちでも、悪い人にはたぶんならないんじゃないかな。歴史をみても、ほんとうに悪いことをした人たちの子どもが、親と同じくらい悪いことをした例は、ちょっと思いつかないしな。実際、その逆になる場合もあるんだよ。悪い人たちが善良な子どもをもち、いい人たちが悪い子どもをもつ場合も多いんだ」

「でも、子どもは親に似るんでしょう？」

「似るところもあるし、ちがうところもある」と、マクドナルド先生は言った。

「子どもは、同じような気質を親から受け継ぐことも多い。それに、同じような才能もね。たとえば音楽の才能とか、絵を描く才能なんかがそうだ。しかし、画家の子どもが同じような才能を受け継いでいても、建築家になることだってある。こんなふうに言えば、いちばんわかりやすいかもしれないな。子どもは親から才能を受け継ぐけれど、その才能をどう使うかは、子どもが自分で決めることなんだ。そして、多くの場合、子どもは親が考えもしなかったことをするんだ」

　「だったら……だったら、たとえばポル・ポトの子どもでも、いっぱい人を殺したりするようにはならないってことですか？」

　「ポル・ポトに子どもがいたかどうか、わたしは知らないな」マクドナルド先生は言った。

　「でも、もしいたとしたら？」

　マクドナルド先生はちょっとためらってから答えた。

　「さあ、もしその子たちがクメール・ルージュ――ポル・ポト軍のことだね――に入っていたとすれば、父親と同じようなことをしたかもしれないな。でも、別のところで育っていれば、たぶんそうはならないだろう」

　マクドナルド先生はマークをじっと見てから、つけくわえた。

　「どうしてこんな質問をするのかな？」

　「ちょっと知りたかっただけです」マークは言った。

　「きみのうちで何か困った問題をかかえてるっていうわけじゃないよね？」先生は（ｱ）言葉を選んでたずねた。

　とつぜんマークは、先生の質問の意味を察して、言った。

　「いえ、問題はなんにもないです。父さんのことや家族のことを心配してるわけじゃないんです」

　マークはわらいだしそうになった。父さんが何かとても間違ったことや悪いことをしでかして、マークがそれを心配してるんじゃないかと、先生はふと思ったのだ。

　マークはあわてて考えて、思いついたことを言った。

　「テレビでポル・ポトのことをやってたから、もし息子がいたら、どんな息子なのかって思っただけです」

　「コックさんになったかもしれないよ……銀行家かもしれないがな……でも、もし父親がやったことを知ったら、うしろめたい思いをしたり、困ったりしたんじゃないかな」

　「だけど、その子の責任じゃないですよね？　お父さんがいっぱい人を殺しても、責任はその子にはないんですよね？」

　「ない」マクドナルド先生はゆっくりと言った。「その子には責任はまったくない。その子が父親と同じように思っていたとすれば、話はべつだけどな。そして、もしその子が、父親が悪いことをしたという事実を認めようとしないとすれば、それは誤りだ。過去にあった間違いをちゃんと見つめないかぎり、人間は同じような間違いをくりかえしてしまうからだ」

　「マクドナルド先生……」

　マークはもう一つききたいことがあったのだが、先生はそろそろ切り上げたいと思っているみたいだった。

　「なんだね、マーク？」

　「ヒットラーやポル・ポトは、あれだけ大量虐殺なんかしたのに、自分たちは正しいことをしてると思ってたんですか？」

　マクドナルド先生は、困っているみたいだったが、ようやく答えた。

　「わからないな。人間は、正しいと思いこんで悪いことをしてしまうこともある。でも、ヒットラーやポル・ポトとなると……わたしにはわからない。もしかすると、よいことをしていると思いこんでいたのかもしれないな」

　「だけど、自分がほんとうに正しいことをしているかどうかは、どうやったらわかるんですか？」マークは、さけぶようにしてきいた。

　先生は（ｲ）肩をすくめた。

　「その質問にも、わたしは答えられないな」

　ちょっとお手上げという顔だった。

　「考えてみないとな。お父さんかお母さんにきいてみたらどうだい？　あるいはつぎの日曜日にスティーブン神父にきいてもいい……きみの質問にちゃんと答えられなくて、すまないな。さてと、わたしはベルが鳴る前に、昼めしを食べにいかないと。質問は、そんなところでいいかな？」

　「はい、もういいです。ありがとうございました」

　Ａ先生は、とにかく答えてくれようとしたのだ。

　でも頭の中の疑問は、午後になってもずっとマークを悩ませていた。

　人は、正しいと思ったことをするべきだ。でも、正しいと思ったことが間違っていたら、どうなのだろう？

　みんながしてることをやればいい、というのは、答えにならない。ヒットラーがやったことから一つわかるのは、Ｂ国じゅうの大多数の人が間違っていたということだからだ。

　当時の人たちは、ものごとをちゃんと考えていたのだろうか？　証拠を調べたり、ラターさんがいつも言っているみたいに統計やなんかを見たりしたのだろうか？　それとも、ただ信じてしまったのだろうか？　それも、信じたかったから、という理由で。

　「マーク、聞いてるのか？」マクドナルド先生が言った。

　「えっ……はい」マークは答えた。

　「だったら、それらしくしなさい。ちゃんとワークブックを開いて……」

　マークはワークブックを開きながら、どこかに答えがあるはずだ、と考えていた。答えのわかる人がどこかにいるはずだ。

【Ⅱ】

　この本の作者ジャッキー・フレンチは14歳のころ、ドイツ語の宿題を手伝ってくれた人から少年時代の話を聞きました。その人は、ナチス支配下のドイツで育ったのですが、家族も先生も周囲の人もみんなヒットラーの信奉者だったので、自分も一切疑いをもたず、障害をもった人やユダヤ人やロマ人や同性愛者、そしてヒットラーの方針に反対する人々は、根絶やしにしなくてはいけないと思い込んでいたそうです。そしてその人は強制収容所の守衛になったものの、戦争が終わると戦犯として非難され、密出国してオーストラリアに渡ってきたとのことでした。「周囲が正気を失っているとき、子どもや若者はどうやったら正しいことと間違っていることの区別がつけられる？」と、その人は語っていたと言います。

　作者のフレンチは、長い間そのことは忘れていました。でもある日家族で「キャバレー」というミュージカルを見に行った時、息子さんが、ウエーター役が美声で歌う「明日は我がもの」に共感し、その後にそのウエーターや周囲の人々がナチスの制服を着ているのに気づいてショックを受け、「自分もあの時代に生きていたら、ナチスに加わっていたかもしれない」とつぶやいたのだそうです。息子さんは当時14歳。それで、フレンチは自分が14歳のときに聞いた話を思い出し、この本を書かなくてはと思ったのでした。

　本書がすばらしいのは、子どもが自分と世界の出来事を関連させて考えたり想像したりしていくところだと思います。今、戦争を子どもに伝えるのは、そう簡単ではありません。体験者の多くがもうあの世へ行ってしまって直接的な出来事として聞く機会は少なくなりました。それに、暗い物語は敬遠され、軽いものがもてはやされる時代です。そんななか、Ｃ子どもへの伝え方を工夫して書かれたこの物語が、今の日本でも多くの人々に読み継がれているところに、わたしは一筋の光が見えているような気がしています。

注　○ポル・ポト＝カンボジアの政治家。一九七六年首相になり、大量虐殺を行った。

問１　【Ⅰ】の文章の語りの特徴の説明として、次のア～オの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　物語に登場しない語り手が「マーク」の視点を通して物語を語っている。

イ　物語に登場しない語り手が「マクドナルド先生」の視点を通して物語を語っている。

ウ　物語に登場しない語り手が客観的に人物を捉えて物語を語っている。

エ　物語の登場人物である「マーク」自身が語り手となって物語を語っている。

オ　物語の登場人物である「マクドナルド先生」自身が語り手となって物語を語っている。

問２　傍線の部分（ｱ）はどのような意味か。次のア～オの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　わかりやすいように言葉を言い換えて

イ　伝わるようにいろいろ言葉を尽くして

ウ　気持ちを悟られないよう口調を変えて

エ　事情を慮ってふさわしい言葉を考えて

オ　心の内が伝わるように素直に表現して

問３　傍線の部分（ｲ）の時のマクドナルド先生の様子はどのようなものか。次のア～オの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　マークの質問にまったく答えられず、息苦しさを感じている。

イ　マークの質問がいつも本質から離れていることに呆れ果てている。

ウ　マークの質問に次から次へと答えることに疲労を感じ始めている。

エ　マークの質問は難しく、自分にはどうにも答えられないと思っている。

オ　マークの質問はいつもとらえどころがなく、今回も腹立たしく思っている。

問４　傍線の部分Ａについて、マークの質問に対してマクドナルド先生はどのような態度をとったか。次のア～オの説明の中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　マークの質問に対しては、答えを知っているにもかかわらず、ベルが鳴る前に昼飯を食べたかったため、わからないと告げたり、他の人に質問するように促したりして、早く切り上げようとした。

イ　マークの質問に対しては、わからないこともあったが、マークが同じ問題を引き起こさないようにするために善悪の判断をつける大切さを熱心に説得しようとした。

ウ　マークの質問に対しては、かねてから考えなければいけない重要な問題だと認識していたが、自分から答えを教えることはせず、質問を投げかけることで、マークが自分で考えを見つけられるようにした。

エ　マークの質問に対しては、普段から答えられないようなことをたくさん質問してくるために困惑しており、曖昧な答えを並べたり、答えようとするふりをしたりしてその場を切り抜けようとした。

オ　マークの質問に対しては、わからないことは答えられないと告げるものの、答えられることに関しては、具体例を交えながら筋道立てて説明するなどして、真摯に対応しようとした。

 ◎問５　傍線の部分Ｂについて、当時の人々が間違っていたのはどのようなことだとマークは考えたのか。【Ⅰ】と【Ⅱ】の文章の言葉を用いて八〇字以内（句読点を含む）で説明せよ。

問６　傍線の部分Ｃについて、【Ⅰ】の文章は、読者への伝え方をどのように工夫していると考えられるか。一〇〇字以内（句読点を含む）で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア

問２　エ

問３　エ

問４　オ

問５　Ａ障害をもった人やユダヤ人やロマ人や同性愛者、そして自分の方針に反対する人々をＢ大量虐殺するヒットラーを Ｃただ信じたいという理由から、Ｄ一切疑いを持たずに信奉したこと。（80字）

Ａ＝３〔虐殺の対象になった「障害をもった人やユダヤ人やロマ人や同性愛者、そして自分の方針に反対する人々」【Ⅱ】が示されていること。〕

Ｂ＝３〔「大量虐殺」【Ⅰ】という言葉とその主体である「ヒットラー」【Ⅰ】・【Ⅱ】が明示してあること。〕

Ｃ＝２〔統計や証拠によらず「信じたかった」【Ⅰ】という理由が示されていること。〕

Ｄ＝２〔当時の人たちの態度「一切疑いを持たず」【Ⅱ】、「信奉」【Ⅱ】が示されていること。〕

問６　Ａマークの素朴な疑問と好奇心を少年らしい親しみやすい言葉で表現し、Ｂ先生も正解を示さないことで、Ｃ読者がマークと一体になって、Ｄ自分と世界の出来事を結び付けて考えたり想像したりできるようになっている。

（96字）

Ａ＝３〔子どもらしい平易で素朴な表現であるということを押さえていること。〕

Ｂ＝２〔マクドナルド先生の誠実で安易に答えない姿勢を押さえていること。〕

Ｃ＝２〔読者がマークの立場になって一体感を持って読み進められる点を押さえていること。〕

Ｄ＝３〔自分と世界の出来事を関連させていることを押さえていること。〕